

# 新頌

北原白秋

青空文庫





海道東征

## 海道東征

## 第一章 高千穂

男聲（獨唱竝に合唱）

神坐<sup>ま</sup>しき、蒼空<sup>あそぞら</sup>と共に高く、み身坐<sup>ま</sup>しき、皇祖<sup>すめらみおや</sup>。邈<sup>はる</sup>かなり我が中空<sup>なかぞら</sup>、窮<sup>きは</sup>み無し皇産靈<sup>すめむすび</sup>、いざ仰<sup>あめ</sup>げ世のことごと、天<sup>あめ</sup>なるや崇<sup>たか</sup>きみ生<sup>あれ</sup>を。國<sup>な</sup>成<sup>な</sup>りき、綿津見<sup>わたつみ</sup>の潮<sup>しほ</sup>と稚<sup>わか</sup>く、

凝り成しき、この國土。  
こにな

邈かなり我が國生、  
はる

おぎろなし天の瓊鉾、  
あめ

いざ聽けよそのこをろに、  
おほやしまあが

大八洲騰るとよみを。

皇統や、天照らす神の御裔、  
みすまる

代々坐しき、日向すでに。  
よよま

邈かなり我が高千穂、  
はる

かぎりなし千重の波折、  
ちへ

いざ祝げよ日の直射す  
ほ

海山のい照る宮居を。  
うみやま

神坐しき、千五百秋瑞穂の國、  
ま

皇國ぞ豊葦原。  
すめぐに

邈はるかなり我が肇はつくに國  
 窮きはみ無し天あまつみ業わざ、  
 いざ征たたせ早や東へ、  
 光宅みちたらせ王みうつくしび澤をを。

## 第二章 大和思慕

女聲（獨唱竝に合唱）

大和やまとは國のまほろば、  
 たたなづく青垣あそがきやま山。

東ひむがしや國もなかの中央、  
 とりよろふ青垣あそがきやま山。

美しと誰ぞ隠る、  
誰ぞ天降るその磐船。

愛しよ鹽土の老翁、  
きこえさせその大和を。

大和はも聴美し、  
その雲居思遙けし。

美しの大和や、  
美しの大和や。

### 第三章 御船出

男聲女聲（獨唱竝に合唱）

## その一

日はのぼる、旗雲の豊の茜に、  
いぎ御船出でませや、うまし美々津を。

海風ぎぬ、陽炎の東に立つと、  
いぎ行かせ、照り美しその海道。

海風ぎぬ、朝ぼらけ潮もかなひぬ、  
艀触接ぎ、大御船、御船出今ぞ。

## その二

あな清明け、神倭磐余彦、その命や、  
あな映ゆし、もろもろの皇子たちや、その皇兄や。

行でませや、おほらかに大御軍、  
 まだ蒙し、遙けきは鴻荒に屬へり。

みめぐみめみおや  
 慶を皇祖かく積みましき、

ただ  
 正しきを年のむた養ひましぬ。

かむがら  
 神柄や、幾萬、年經りましき、

みひかり  
 暉や、かつ重ね、代々坐しましぬ。

にぎたま  
 和み靈、また和せ、ただに安らと、

あらたま  
 荒み靈、まつろはぬいざことむけむ。

おほみいつ  
 大御稜威い照らすと御船出成りぬ、

みこ  
 日の皇子や、御銚とり、かく起ちましぬ。

## その三

日はのぼる、旗雲の照りの茜を、  
いざ御船、出でませや、明き日向を。

海風ぎぬ、満潮のゆたのたゆたに、  
いざ行かせ、照り美しその海道。

海風ぎぬ、朝ぼらけ潮もかなひぬ、  
艫舳接ぎ、大御船、御船出今ぞ。

## 第四章 御船謠

男聲（獨唱竝に合唱）

## その一

御船出ぞ、大御船出、

御伴船舉りさもらへ、

御伴びと舉り仰げや。

揺りとよめ科戸の風と

聲放て、東に向きて。

大御船眞棍繁ぬぎ、

照りわたる御弓の弦、

あな清明け、神にします、

あな眩ゆ、皇子にします。

はろぼろや大海原、

涯なしや青水沫、

揺りとよめ大き國民、

大君に、

この神に、

讚へ言、

壽詞申せや。  
よごと

その二

荒海の、

荒海の潮の八百道の、  
やほぢ

八潮道の、  
やしほぢ

潮の八百會に、ハレヤ、  
やほあひ

とどろ坐す速開津姫に、  
ま はやあきつひめ

朝開、朝のみ霧の  
あさびらき

遠白に、  
とほしろ

末鎮み  
すゑじづ

鎮まらせ、  
しづ

み眼すがすがと笑ませとぞ、  
ゑ

きこしめせと申さく

み船謠。  
ふなうた

その三

い

ヤアハレ

海原うなばらや青海原。

ヤアハレ

青雲あをぐもやそのそぎ立たち、

その極きはみ、こをば。

我が海おほきみのと大君宣のたまらす、

我が空そらと皇孫すめみま領しらす。

ろ

ヤアハレ

潮漚しほなわのとどまるかぎり、

舟の舳への行き行くきはみ。

ヤアハレ

島かけて、八十嶋かけて、  
おほうみ大海やそしまに舟満ちつづけて。

見はるかしおほきみの大君宣らす、  
よも四方つ海すめみまし皇孫領らす。

は

ヤアハレ

くにつち國土や、おほくにつち大國土。

ヤアハレ

國の壁かべそのそぎ立たち、  
 その極み、こをば。

我が國と大君おほきみの宣のらす、  
我が土と皇孫すめみまし領しらす。

に

ヤアハレ

青雲あをぐものそぎ立つきはみ、  
白雲しろくもの向伏むかふすかぎり。

ヤアハレ

谷蟻たにくのさわたるきはみ、  
馬の爪とどまるかぎり。

見はるかし、大君おほきみの宣のらす、  
四方よもつ國皇孫すめみまし領しらす。

ほ

ヤ  
狭の國は廣くと、

ヤ  
嶮し國平らけくや。

ヤ

遠き國は綱うち掛け、

もそろよと、

もそろと、

國引くと、引き寄すと。

あなおほら、おほきみの大君宣らす、

あなをかし目翳しおはす。まかげ

善しや、善しや、いやさか彌榮。

とどろとどろ、いやさか彌榮。

## 第五章 速吸と菟狹

その一

男聲獨唱

海原うなばらや青海原、  
 海道うみつちの導みちびきや、早さや槁根津日子ねつひこ、  
 速吸はやすひの水門みとになも、その珍彦うづひこ。

童聲或は女聲合唱（童ぶり）

龜しほの甲かに揺られて、  
 潮しほの瀬せに揺られて、  
 かぶりかうぶり海あまの子こ、

棹さやらな、附ついまるれ、

波かぶりかぶるに、

み船へと移らせ、

名をのれ早や早や、

み船へまる出づるは

臣やぞとそれこまをす。

國はつ神と這はひこごむ。

潮みづく國つ神、

海豚いるかの眼ま見みよな、

遠眼とほめ、銳眼とめ、慧さかしな、

羽はぶり羽はぶりおもしろ。

その二

男聲女聲（交互に唱和竝に合唱）

菟狹はよ、さす潮の水<sup>しほ</sup>上<sup>みなかみ</sup>、

豊國<sup>とよくに</sup>の行宮<sup>かりみや</sup>。

ああはれ 足<sup>あしひとつ</sup>一 騰<sup>あがりのみや</sup> 宮<sup>みや</sup>とよ、  
行宮<sup>かりみや</sup>。

足<sup>あしひとつ</sup>一 騰<sup>あがりのみや</sup> 宮<sup>みや</sup>は、  
行宮<sup>かりみや</sup>と

青の岩根<sup>ひと</sup>に 一 柱<sup>はしら</sup>坐<sup>ま</sup>す。

足<sup>あしひとつ</sup>一 騰<sup>あがりのみや</sup> 宮<sup>みや</sup>に参出<sup>まゐづ</sup>ると、

大わたの龜<sup>く</sup>や、川<sup>く</sup>のぼり來<sup>く</sup>る。

足<sup>あしひとつ</sup>一 騰<sup>あがりのみや</sup> 宮<sup>みや</sup>の大御饗<sup>おほみあへ</sup>、

誰<sup>た</sup>が獻<sup>たてまつ</sup>る、はるか雲居<sup>うんこ</sup>に。

足<sup>あしひとつ</sup>一 騰<sup>あがりのみや</sup> 宮<sup>みや</sup>は菟狹津彦<sup>うさつひこ</sup>、

朝<sup>あした</sup>さもらふ、夕<sup>ゆふべ</sup>さもらふ。

あしひとつあがりのみや  
 足 一 騰 宮 は湍の上や、  
 足一つ騰り、雲の邊に坐す。

ええしや、をしや、  
 ええしや、をしや。

## 第六章 海道回顧

### その一

男聲女聲（交互に唱和竝に合唱）

かかなべて、日を夜を、海原渡り、  
 かがなべて、將た歳を、宮遷らしき。  
 ああはれ、その幾歳、

ああはれ、その行き行き。

年ごとに、御伴船、いや敷殖えぬ、

つぎつぎに、御従びと、またいや増しぬ。

ああはれ、また春秋、

ああはれ、そが海山。

その二

月の端や、足一騰宮、

一年や、筑紫の崗田の宮。

多祁理とも、阿岐の埃の宮、

たづたづや、七年や。ああはれ。

吉備にして、また八年、高嶋の宮、

大和はも遠しとよ、高千穂よ遙けしと。

その三

かがなべて、日を夜を、海原渡り、  
 かがなべて、將た歳を、宮遷らしき。

ああはれ、その幾歳、

ああはれ、その行き行き。

満ち満つや、み蓄たくはへ 早やかく成りぬ、  
 天あめの下ことむけむ、秋とき今成りぬ。

ああはれ、えしや、

ああはれ、今ぞ秋ときや。

第七章 白肩の津上陸

## 男聲（獨唱竝に合唱）

## その一

青雲あをぐもの白肩しろかたの津つ、その津に、  
 雄をたけびぞ今あがる、御船みふね泊はてぬ。

いざのぼれ大御軍おほみいくさ、  
 いざ奮ますらをへ丈夫との伴とも。

浪速なみはやの邊へに騒あちがもぐ味あ焼や、その渚すを、  
 追おひ押しほしに押しほしのぼり、み楯たてな竝なめぬ。

いざのぼれ大御軍おほみいくさ、  
 いざ奮ますらをへ丈夫との伴とも。

## その二

日下江くさかえの蓼津たてつ、その津に、

雄たけびぞ今あがる、大御軍。  
おほみいくさ

いぎのぼれ、大和は近し、

いぎ奮へ丈夫の伴。  
ますらを とも

浪速の潮なし遡ると、  
なみはや うしほ さかのほ

我が行かば何はばむ、長髓彦。  
ながすねひこ

いぎのぼれ、大和は近し、

いぎ奮へ丈夫の伴。  
ますらを とも

## 第八章 天業恢弘

男聲女聲（獨唱齊唱竝に合唱）

神坐しき、蒼雲の上に高く、  
ま あをぐも うへ

高千穂や 觸峯。  
くじふるたけ

邈はるかなりその肇はつくに國、  
窮きはみなし天あまつみ業わざ、  
いざ仰おほみことげ大御言おほみことを、  
畏かしこきや清さやの御鏡みかがみ。

國くにありき、綿津見わたつみの潮しほと稚わかく、  
光宅みちたらし、四方よもの中央もなか。

邈はるかなりその國くに生うみ、  
かぎりなし天ひつぎつ日嗣ひつぎ、  
いざ繼ことよがせ言依ことよさすもの、  
勾まがたま玉たまとにほひ綴つづらせ。

道みちありき、古いにしへもかくぞ響なきて、  
つらぬくや、この天あめ地つち。  
邈はるかなりその神かむさが性さが、

おぎろなしみ<sup>つるぎ</sup>劍よ太刀<sup>たち</sup>、

いざ討<sup>う</sup>たせまつろはぬもの、  
ひたに討<sup>う</sup>ち、しかも和<sup>やは</sup>せや。

雲蒼<sup>かみ</sup>し、神さぶと彌<sup>いや</sup>とこしへ、

照<sup>くは</sup>り美し我が山<sup>やま</sup>河<sup>かは</sup>。

邈<sup>はる</sup>かなりその國<sup>くに</sup>柄<sup>がら</sup>、

動<sup>ゆる</sup>ぎなし底<sup>すめら</sup>つ磐<sup>いはね</sup>根<sup>ね</sup>、

いざ起<sup>すめら</sup>たせ天<sup>あめ</sup>皇<sup>みこと</sup>、

神<sup>かむやま</sup>倭<sup>いはれ</sup>磐<sup>ひ</sup>余<sup>この</sup>彦<sup>のみ</sup>命<sup>こと</sup>。

神<sup>ま</sup>と坐<sup>おほ</sup>す大<sup>ほ</sup>稜<sup>み</sup>威<sup>いつ</sup>高<sup>た</sup>領<sup>か</sup>らせば、

八<sup>あめの</sup>紘<sup>した</sup>一<sup>ひと</sup>つ宇<sup>いへ</sup>とぞ。

邈<sup>はる</sup>かなりその肇<sup>はつく</sup>國<sup>くに</sup>

涯<sup>はて</sup>も無<sup>あま</sup>し天<sup>あま</sup>つみ業<sup>わざ</sup>、

いざ領らせ<sup>やまと</sup>大和ここに、  
雄たけびぞ、彌<sup>いやさか</sup>榮を我等。

## 建速須佐之男命

建速須佐之男命

枯山の卷

第一段

をを、をを、  
をを。

神ぞ居れ、喚び哭く

冥き神、

かむさが  
神性や、霹靂と

たけだけ  
猛猛し、ひと柱、

しや、須佐之男命、

建速須佐之男、

速須佐之男、

ひたぶるや、益良神と  
あらかみたま 暴ぶる 荒御魂の 大童  
おほわらはへ

雄叫び、

泣きいさち、

たたら 鞆踏み、

蹴く急はららかすや、

纏まき、放ゆづつまぐしつ湯津爪櫛、

美豆良みづら振り亂り、

拳たたき、

搔むなさぎい垂らす、胸前むなさぎや

振り分やつかひげつ八握みすまる髭、

鳴りとよむ御統みたまの御珠、頸珠、

手纏たまきひぢまき、釧やや、

ゆらかす足玉の緒もゆらに

揺り立て、

揺り荒すさべば、

凄まじ、この生はみ終はての神、

さながらや、海うみ阪さかの昂あがり騰

押し移る

神かんだちくも立雲、

早手風、飛いなづまぶ電光、

とどろ立つ蒼あをの虬みづち、

閃かきつめめく搔いら爪の焦なだちを、卷なだき崩なだれて

覆うろくづす鱗魚の大降り雨、

かく歎なげば、

かく哭おらき喚おらべば、

泣くたき腐くたし、泣はき噪はれば、

うち冥くらむ世くらのことごと、

降くたり腐くたすそのことごと、

海河も泣くたき涸くたらすと、

しとど垂る長霖雨や、ああ、  
光無し、時無し雨、

日も無し、

夜はも無し、

ただ戀し、妣の國、

ただ遠し、根の堅洲國、

鬱にただ、鬱に泣き隠りぬ。

## 第二段

をを、をを、

をを。

神ぞ居れ、喚び哭く

冥き神、

おどろしき神性の、

ひたぶるの人性の、

しゑや、縦しや、善き悪しき、

ただ歎く暴風雨の神、

霧立つや八雲立つ

出雲の子ら、

大族、國造の祖先神、

しや、建速須佐之男命、

この命ぞ、

秀に見る空のさきざき、

眼に見る國のまほろば、

たたなづく青垣山は

青山の石根、木の立、

神弱り、泣き腐すと、

神さぶと、枯山と泣き枯らすと、

息長の息嘯の風と

雨呼ばひ、哭き喚び、泣き隠れば、

日を竝べて、夜を竝べて、かく歎けば、

鬱おほにただ鬱おほに冥くらむ。

かくなれば、世の神神、

をを、神神、

清明まさやけき、ひとしほに和御魂にぎみたま、

顯あきらけく、美いっくしき、

常しそよぎ、奇してふる神、

山ぬと野ぬの精いきすたま靈たま、

大山津見、

鹿屋野比賣かやぬひめ二柱の神、

そが持ち分けて生みませる神、

もろもろの生むすびきの産巢、

大おほつち地の草くさわき分、木の神くくのちのかみ久野智神、

末わかずゑの岐わかれの神、

澄ひもろぎみわたる神境ひもろぎや、

齋ゆづき槻、湯津真椿ゆづまつばき、

葉廣熊白樹、  
はびろくまがし

嚴櫃や、白檮や、處女檀、  
いつかし しらかし をとめまゆみ

ああ、黒檜、雲懸るさるをがせ、  
くろび かなかみ

雪の上の白樺や、  
ゆきのうへ

水上の石楠の神、  
みなかみ

柊や、ひらきそよご、  
ひひらぎ

繁み立つ馬酔木、黒木、  
ししみ あしび

磐村の犬大羊齒、  
いはむら

沼邊には茅萱、葦、髪がやつり。  
ちがや

もろもろの鏡葉や、

霞針、織き葉の神、  
かすみぼり ほそ

落葉木や、

若蒨の光る木の芽、  
わかもえ

花隠る杪。  
はなこもへご

それを何ぞ、泣き枯らすもの、

日に奪ひ、夜に奪ひ、雨ふらせば、

ありとある立たちのことごと、

ありとある色のことごと、

勢きほひ無し、臥こやり撓たわむと、

すべしなし、立ちも滅ぶと、

水みの氣け盡けき、素も力とち盡けき、

ああはや、匂失せぬ。

### 第三段

をを、をを、

をを。

神をぞ居おられ、喚なび哭なく、

冥くらき神、

しや、童わらべ、速はや須す佐さ之の男を、

大おほ天あめや高天原、

日は治しらせ、大おほ日ひる靈め貴むち、

さもこそや夜之食國、  
よるのをすくに

夜は治らせ、月よ月讀、  
よし つくよみ

海原、吾はえ治らさじ、  
うなのほらあ

言依させ、吾は聽かじ、  
ことよ あ

神柄ぞ、暴ぶる神、  
かむがら あら

膽太の毗裂くと、  
きもぶとまなじり

言擧ぐと、泣きいさち、

抗ふと、おぞえ吼え立つ。  
あらが

かく、吼え立てば、

大海よ、滄海原、  
あせうなほら

引き引きに歪み退き、  
ひずしぞ

潮干るや、干潟泡立ち、

沸き立つや、蠍なすもの、  
さそり

菊石なす、鰻なすもの、  
きくめ むなぎ

鰓の怪や、飛ぶ翼の龍、  
えらけ はね たつ

やつるぎ  
八劍の蜥蜴草食み、

みおやどり  
始祖鳥 荒き齒に咋ふ。

あをみどろ  
青水泥 ひとらが沼、

わだかま  
蟠るぬめり蟒、

憚らず

あらぬおほうし  
曠野巨牛、

畏るなし

まが  
禍つ狼。

をを、をを、をを、

かく經れば、降りつづく雨をもちて、

蛆沸き、  
あざ  
れ、蒼蠅なす神神のおとなひ、

よも  
萬つ四方つ神の災、

高津鳥の災、

は  
昆虫の災、

あぶら  
脂なす、  
ゑづ  
逆吐き、  
たぐ  
嘔吐り、

生み、殺め、疼き、呻ぶ

もろもろの邪、

曲り、朽ち、饑え、死ぬる物の穢、

常無く、火の氣無く、

耀かず、祓ひ了へず、

下心澱み、

清まず、障り、

嚏り、瘡り障り、

※しく、焦だたしく、

苦しく、息づかしく、

瘡病、搔き淫ると、

醜つ神、追ひ挑むと、

ことごとや世のことごと、

堰きたぎち、

泣き、言問ひ、

舉り泣き、泣きなづみて、  
ああはや事起りぬ。

第四段

をを、をを、

をを。

神ぞ居れ、喚び哭く、

冥き神、

果しなし、泣きいさつと、

海岸や上高岸、

巖窟なす岩戸、沙面、

腹這ふ大海膽の

紅殻や、生死殻、

錆釘のここだくの釘

その根、幹疎にうち埋めて、

開き葉の高張りや、

大葉蘇鐵、

をを、をを、

をを、

滴るや長雨しづき、  
ながめ

水松布なす美豆良霽き、  
みづら

苔むすや、股、臂、  
ももただむき

細螺と珠い這ひ、  
しただみ

疊菰禪破れ裂け、  
はかま

小鈴落ち、脚結紐解け、  
あゆひ

はららぐと、その短裳、  
みじかも

空見ず、ただ歎けば、

海見ず、ただ歎けば、

しや、伊邪那岐大神、  
いざなぎのおほかみ

埴も無し、建須佐之男、  
たけすさのを

汝、  
みまし

言こと依よさす國は治しらさず、

何もかも泣きいさちる。

父みかみのの御神詔りたまへば、

伊いざなみ邪那美よ、僕あが母、

妣ははま坐せば、

根ねの堅かた洲國、

僕あは戀こほし、罷まかりゆかずば、

ただ哭なくと泣く。

ゑや、愚かや、

な住みそ、さば、此の國原、

行まかけ、罷まかれ、

神かむがら柄ぞ、もとな流さすら浪へ、

神やらひやらひたまふと、

ああはれ、建たけ須す佐さ之男のを、

眼も白しらみ、追ひやはらはれ、

泣き涸らし、  
はた、  
嘔<sup>わ</sup>ひぬ。

大陸序曲

## 路傍にねむる

戦争畫報を見て

ひた疲れ、ああ、このごと

路の端はしにねむる人、命いのちなり、赤き陽ひに、

こんこんとうち伏しぬ。

正しきはまじろがず

天地あめつち おもてに面まふらず、戦士いくさひと、守護神まもりがみ、身をさらし、髭ひげも凍こる。

なべて見よ、この姿、

晝も夜もここに無し、  
祖國のみ、民族の  
血と肉と、一つのみ。

まつろはず、信なき  
滿蒙のかの匪賊。

憤る、憤るもの、  
力なり、ためらはず。

戦へば勝つ人も  
眠る間無し、小床無し、  
せめて今、銃又むと  
ひきかぶるものも無し。

涙せよ、この姿、

晝も夜もここに無し。  
ここにあり、土のうへ、  
ひたぶるにねむる人。

## 狙ひ

しづかなり夏空、  
軍の眞上、  
畏ろしく形無きもの  
風をはらむつかのま。

敵なりや、稚き  
將た生、

現れ、また現れ、  
視野は透る。とほ

響無し、聲も無し、

氣息のみ

輝やかし時秒のみ

満ち、いきるる

ひたおもて、黄きの土つち。

軍はあり、草をかつき

山のごとしづもる戦車、

晴せいがん眼がんにひたと向ひ、

未まだ放たず。

そのはじめ、天あめ地つち

創つくられて新あらたに、

俟いつつありき、何なにごとかの  
一いつの動き。

どとと射つ我か、彼か、

このたまゆら、

勝つ者の正しき狙ひ

神のみぞ知ろしめすらむ。

## 熟眠

陰かげはあり巨おほき戦車、

据かわれり休やすらひのあひだ、

道のべ、  
 響さばなす蒼蠅へのみ  
 集たかり集たかる。

ねぶたし、ただ

疲れはてて、

空も無し、仇も無し、

戦いくさ、小止をやみ。

命なり、張り満つる

五日いつか、六日むいか、

夜よも無し、朝も無し、

飲まず、食はず。

我射ちぬ、彼射ちぬ、

しかも大暑、

何ごとのしらすぞとも

知らず、射ちぬ。

強しとも弱しとも

誰か分<sup>わ</sup>かむ。

ねぶたし、ただに<sup>まぶた</sup>瞼の

重く垂り來<sup>く</sup>。

もぐりて、深くもぐりて、

兵なり、我ら、ねむる。

戦車よ、鐵の戦車、

しばしを、

ああ、しばしを光蔽へ。

ねぶたし、

ただに眠ると、

何も無し、我も無し、

ひた土に額押しあて。

眞晝ぞ、ただ虚しき。

饑ゑたりや、饑うるともいざ、

生きむとも死なむとも

將た思はず。

ねぶたし、ただねぶくて

早や識らず戦も、彈丸も

ねぶたし、眠らしめて

つかのま母の聲聴かしめ。

## 突撃

突撃、

突撃するもの、

突くなり、突きまくり、

ひた刺し、刺しつらぬき、

銃床逆手さかてもろに

飛び入り、はたきのめし、

はたくや、たたき斃す、

これのみ、ただこれのみ。

突撃、

突撃するもの、

ひたぶる、ひたぶるなり、  
生<sup>しやうし</sup>死<sup>よこしま</sup>無し、邪<sup>よこしま</sup>無し、

戦<sup>ほ</sup>ひ、戦<sup>ほ</sup>ひ惚<sup>ほ</sup>れ、

突<sup>ほ</sup>き刺<sup>ほ</sup>し、た<sup>ほ</sup>た<sup>ほ</sup>き斃<sup>ほ</sup>し、

聲<sup>ほ</sup>のみ、息<sup>ほ</sup>あるのみ、

我<sup>ほ</sup>あり、跳<sup>ほ</sup>ぶあるのみ。

突<sup>ほ</sup>撃<sup>ほ</sup>、

突<sup>ほ</sup>撃<sup>ほ</sup>する時、

た<sup>ほ</sup>だ<sup>ほ</sup>見<sup>ほ</sup>る、命<sup>ほ</sup>ある、醜<sup>ほ</sup>き、

顔<sup>ほ</sup>ゆがめ、眼<sup>まなこ</sup>ひらき、

恐<sup>ほ</sup>れに、膽<sup>きも</sup>へし消<sup>ほ</sup>え、

わ<sup>ほ</sup>な<sup>ほ</sup>な<sup>ほ</sup>き、わ<sup>ほ</sup>な<sup>ほ</sup>な<sup>ほ</sup>くもの。

敵<sup>ほ</sup>なりや、彼<sup>ほ</sup>なりや、

將<sup>ほ</sup>た<sup>ほ</sup>知<sup>ほ</sup>らず、

斃れに、ただ斃れぬ。  
響きて、ひと斃れぬ。

清明古調

## 白須賀

遠州濱名郡白須賀

白須賀は昔の宿<sup>しゆく</sup>、

ただ白し、ものさびて、

その藪<sup>しとみ</sup> はひり戸、

なべてみな同じ障子。

ただわびし、軒<sup>のきなみ</sup>竝の

同じ型、

出で、はひる人すらや、

同じ影。

音も無し、なにひとつ、

埃づくものも無し。

草屋のみ、

弱き日あたりたる。

いづこぞ遠江灘、

潮見坂ほどこかくて、

薄ら曇る低き空を

風も来ず。

冬ながら、その屯<sup>たむろ</sup>。

ほのなごむ家がまへ、

ここ過ぎて、きびしとも、

おもほえず、寒しとも。

白須賀は舊街道、

朱の鷄冠とさかふりたてて  
軍鷄しやもの居れども。  
そは暮のひとあかりのみ。

## 神苑

明治神宮西參道

幽かすけさや、この日なかの  
邃ふかき木の木こしづく。  
開とけよ、聲きこを雉子ぎす、  
外との霞とに。

たふとさや、神苑の  
光る陽ひの櫃かしわか若葉かば、

閑けさや、黝み闌くる  
 こもごもの青と緑。

とどめじ、塵ひとつ、

玉の砂敷きならして、

すがすが  
 清々し、參道の

うねる徑、こを行かばや。

芝生や、緩るきなだり、

寶物殿、

白きは隠る夏の

花のえご、香の一本。

よく觀よ、和み靈に

吾が幼子、

龜の子の揺る影を、  
鱗ひれ、さざなみ。

しづもれよ、ひるまあらし晝間嵐、  
現うつながら、

ほのぼのと雲は立ち、  
神と人息いぶ吹きかよふ。

## 雪朝

清明さやけさや、この雪、  
ふりおける雪につみ、  
木々につみ、

燈籠にしろくつみぬ。

神垣かみがきや、このあした、

石いはし走る水の音の

うちひびき、

氷柱つららみな新なり、日の光に。

この雪に跡つくる、

兎なり、跳び跳びて。

すがしきは笹の芽食はむ

毛にこの柔をさなもの、幼し。

満ち満かたじけなつ忝かたじけなさ、

何事かじこも畏かしこくて、

息いきづきぬ、

國の秀ほの山高ほきに。

神ながら、この道に

ああ我や言ふすべなし、

おほみこあの生れまして

春あまさに雲ぞ騰ある。

拍手かしはで、

拍手かしはでぞ、ただ。

## 白樺

清すがしきは雪に立つもの、

白樺の林よ、げに

しろき木肌、  
こはだ

そは眞處女。  
まをしめ

かす幽けさよ、雪の溪たにに

直立すくたち、ほそき幹の

雪よりも光帯びて。

日は曇り、しろき眞晝、

聲も無し、このかがやき、

風も無し、色ひといろ。

閑しづけさよ、興安嶺、

ひえびえとけむる梢、

鷹すらも一羽飛ばす。

何すとか、ここに住む

白系露西亞、

貧しきは淨きよらかに窻まどひらきて。

白夜はくやともほのあかる

空ひととき、

白樺の林よ、げに

光る神々。

煙霞餘情

## 丸彫

丸彫まるぼりに我わを彫ほる。

この眼やいばの刃やいば。

丸彫まるぼりのこの木彫

細すかくも、素すに荒あくも。

丸彫まるぼりのこのもしさ

我彫わぼりらむ、みづからを皆。

丸彫まるぼりのてづつなさ、

觸ふれつつも、この己おのれ。

丸彫まるぼりよ、息つめて、  
息かけて、いとほしと。

丸彫まるぼりのうるはしき、  
こを見よと我思ふ。

丸彫まるぼりに刻きぎむもの、  
我ならず、何かある。

丸彫まるぼりに彫ほりあげて、  
その白き手に獻たまげまし。

## 道の手

ふるさとや、わが母の

この山の手、

昔見しさながらを

ただしづかに。

闌<sup>た</sup>けたり櫛<sup>はし</sup>若<sup>わか</sup>葉<sup>かば</sup>、

池も見えて、

壁赤き山の家<sup>いへ</sup>の

ひとつふたつ。

築石や、棚畑や、

ふかき晝を

日の照り、

時うつる、この片岨。かたそへ

影はあり、獨佇たつ

よき童わらは

おもぎし、我かとも、

いま見上げつ。

鸞鳥うそどりよいづくにか

鳴き、くくみて、

色、匂、さまわかず、

風なるか、空なるかも。

北の關せき、南の關せき、

この道の手、

我は見る、我が昨日きのふの

をさなごころ。

こさめひたき

色はあり、聲にのみ、

こさめひたき、

雫のみこまかなる

この朝あけ。

花はあり、影にのみ、

ひとりしづか、

香<sup>にほ</sup>ひのみ寂びたもつ

杉よ檜。

巢は懸<sup>かか</sup>る、高くのみ、  
 ウメノキゴケ、  
 氣色<sup>けしき</sup>のみ、母鳥<sup>おやどり</sup>や  
 姿、羽<sup>は</sup>ぶり。

現<sup>うつ</sup>あり、しろくのみ  
 濡るる光、  
 卵のみ、おそらくは  
 四つか五<sup>い</sup>つ。

色はあり、聲にのみ、  
 こさめひたき、  
 雫よ雫よと、  
 ただ幽かに。

## 臺南旅情

もの憂<sup>う</sup>さや、老<sup>ラオチウ</sup>酒<sup>ウ</sup>や、  
瓜<sup>クエチイ</sup>子<sup>イ</sup>はとり食<sup>ク</sup>めども、  
にほひなし、晝<sup>チウ</sup>はまだ  
彩<sup>サイ</sup>燈<sup>テウ</sup>の切<sup>キ</sup>子<sup>シ</sup>硝<sup>シウ</sup>子<sup>シ</sup>。

空<sup>あだ</sup>なりや、

雲<sup>ウン</sup>に行く日<sup>ニチ</sup>のまぼろし、  
ゆゑ<sup>ユヱ</sup>わかず、うつ<sup>ウツ</sup>つなし、  
女<sup>め</sup>童<sup>わらべ</sup>は言<sup>コト</sup>問<sup>ト</sup>へども。

梅雨つゆぐもり

影にのみ、朧たけて、

低くのみ

アアチウ  
烏秋の飛びたわむと。

濡れがちや、

朱の寂さびや、

そむね  
反り棟の礪瓦、

せきかんろう  
赤嵌樓。

クエチイ、クエチイ  
瓜子、瓜子は眼の下の小ちひさ黒ほくろ子

齒にあてつつ、

齒にあてつつ、

おろか  
愚しく美しく時は過ぎぬ。

註。瓜子（西瓜のたね）烏秋（臺灣烏）  
赤嵌樓（蘭人の所謂プロヒレンチヤ城なり）

## 鴛鴦

飛ぶ禽とりとしも、幽かだに  
 思ひかけずておろかさよ、  
 こずゑをしどりの雪に鴛鴦の  
 たつる羽音はあとを觀しや君。

## 白鷺

雪のおもてに白鷺の  
 影ほの青き春の晝、

現うつつはそよぐ風さきに  
イたたずむもののせつなさよ。

## 千鳥

月に觀し夜よの色ならで  
氷は薄し水のうへ、  
つかれば泛ぶ羽ながら  
あまりにしろし我が千鳥。

紀元二千六百年頌

交聲曲詩篇

大陸の黎明

第一章 序曲

天地あめつちの闢ひらけしはじめ、成りませる神々かみを、

(讚たたへまつれ、いざや。)

天照あまてらす大御神おほみかみ、皇祖すめらみおや、  
皇祖すめらみおやかくぞ、

(讚たたへまつれ、いざや。)

言依ことよさす中なかつ國くに、大八洲おほやしまこの國土くにつち、

(讚へまつれ、いざや。)

天<sup>あめ</sup>壤<sup>つち</sup>と窮<sup>きは</sup>みなき、天津日嗣<sup>あまつひつぎ</sup>、ここに

(讚へまつれ、いざや。)

げに宇<sup>いへ</sup>とおほひます 八<sup>あめのした</sup>紘<sup>た</sup>、陸<sup>くが</sup>を海<sup>うみ</sup>を。

(讚へまつれ、いざや。)

大きなり、彌<sup>や</sup>榮<sup>は</sup>や、天<sup>あめ</sup>つ御<sup>み</sup>業<sup>わざ</sup>、  
げに崇<sup>たか</sup>し、はや和<sup>やは</sup>す大<sup>おほ</sup>御<sup>み</sup>軍<sup>いくさ</sup>。

(讚へまつれ、いざや。)

おお、今<sup>いま</sup>ぞ、大<sup>おほ</sup>やまと、雲<sup>あが</sup>居<sup>が</sup>騰<sup>たか</sup>り、

おお、今<sup>いま</sup>ぞ、大<sup>おほ</sup>き御<sup>み</sup>代<sup>しろ</sup>、照<sup>あ</sup>りわたらせ。

(讚へまつれ、いざや。)

(讚へまつれ、いざや。)

## 第二章

種子ありき、神産び玉と凝るもの、  
かく在りき、在りて生き、香は蘊みぬ。

土なるや、おほくがモンゴル 大ぎ陸蒙古の底ひふかく、  
こも 隠らひぬ、あらがねはほ 鑛と巖との隙埋もれ。

時ありき、日も知らず、星も別かず、  
ただ在りき、かく在りて千五百万の歳。

驚けよ、この命、くし 靈びに若し、  
ほ 讚めあげよ、かく古りてかく全けし。

世々ありき、人は興り、地に滿ち滿ちき。  
 國興り、將た滅び、また代々ありき。

霧るや、黄なる沙、嵐と哮び、  
 漲るや、洪き水、天傾ふけぬ。

なほ在りき、生きの芽の命薫すと、  
 俟つありき、つひに來むそが黎明。

海を越え、空を蔽ひ、とどろ來るもの、  
 地響や、音爆せて翼搏つもの。

誰ならず、日の御裔、久米大伴が後、  
 神々の我が登音、大御軍。

俟<sup>ま</sup>つありき、大き<sup>くが</sup>陸、今かがやけり、  
さ緑や、はてしなくよみがへるもの。

種<sup>たね</sup>子ありき、神<sup>かみ</sup>産<sup>むす</sup>び玉<sup>たま</sup>と照<sup>て</sup>るもの、  
命<sup>いのち</sup>なり、息<sup>いき</sup>づく<sup>つ</sup>と芽<sup>め</sup>ぶきそめぬ。

### 第三章

聞<sup>き</sup>け大陸<sup>しりのめ</sup>の黎<sup>し</sup>明<sup>のめ</sup>に響<sup>こ</sup>くは何ぞ嘯<sup>せう</sup>と、  
とどろと進む<sup>ぢひびき</sup>地<sup>ぢ</sup>響<sup>ひき</sup>の敢<sup>あ</sup>て押<sup>お</sup>し行<sup>い</sup>く勢<sup>ほひ</sup>を。

海<sup>うみ</sup>を越<sup>こ</sup>えたる百萬<sup>ひゃくまん</sup>の大<sup>おほ</sup>御<sup>み</sup>軍<sup>いくさ</sup>の雄<sup>ゆう</sup>叫<sup>こゑ</sup>びは  
旗<sup>はた</sup>雲<sup>ぐも</sup>高<sup>たか</sup>くさしのぼる日にこそ勇<sup>ゆう</sup>めまのあたり。

沙漠の嵐吹き荒ぶ北は蒙古、滿洲里亞、  
見よ、長城の嶮にして八達嶺は雲鎮む。

天より來る大黄河、長江の水さかしまに、  
ひた攻めのぼる兵の勝鬨すでに年經りぬ。

神助の風に艦泊てて月落ちかかるバイヤス灣、  
椰子の葉蔭に枕ぎて夢むは誰ぞ海南島。

ああ南の潮黒く、呼べば應へむ波の涯、  
俟つある民の歡びに結びて誓ふ共榮圈。

思へ、とどろく蹙音に大御軍の征くところ、  
物ことごとくよみがへり、茜さす日ぞ照り滿たむ。

## 第四章

大いなり、今にして現人神あらひとがみ、かく坐せばおは、

かぎりなき大御稜威おほみいつかくあらせば。

(彌榮いやさかや、八紘あめのした一つ宇いへと

彌榮アジャヤや、大き亞細亞、南の海。)

新あらたなり、早や目覺め、湧きあがるもの、

どよめきは天あめに滿ち地つちに滿ちぬ。

(彌榮アジャヤや、この大き朝とどろき。

彌榮アジャヤや、この大き朝とどろき。)

天あまぐも雲いにしへやはのあをくたなびく大き陸くが

かく古も和したまひき。

聲はあがる彌榮

紀元二千六百年壽詞

聲はあがる、彌榮、

とどろきはいやあがる、彌榮とぞ。

おほきみ  
大君は神にし坐す、  
おほみいつ  
大御稜威神とし坐す。

あま ひつぎ  
畏きや天つ日嗣、

いくたるひ  
幾足日、  
いくちとせ  
幾千歳しろしめす。

はつくに  
青雲や、肇國や、大やまと、  
かむやまといはれひこのすめらみこと  
神倭磐余彦天皇。

かく宣<sup>の</sup>らし、かく坐<sup>ま</sup>しき天<sup>すめらみこと</sup>皇、  
 八<sup>あめのした</sup>紘<sup>いへ</sup>宇<sup>いへ</sup>よげに、一つ宇<sup>いへ</sup>と。

聲はあがる、彌<sup>いやさか</sup>榮、

とどろきはいやあがる、彌<sup>いやさか</sup>榮とぞ。

現<sup>あきつがみ</sup>神<sup>かみ</sup>今<sup>いま</sup>にし坐<sup>ま</sup>す、  
 大御<sup>おほみ</sup>稜<sup>いつ</sup>威<sup>い</sup>日<sup>ひ</sup>のごと坐<sup>ま</sup>す。

ただ明<sup>あか</sup>し天<sup>あま</sup>つみ業<sup>わざ</sup>、  
 押し照<sup>あ</sup>るや大<sup>おほ</sup>き陸<sup>くが</sup>、南<sup>みな</sup>の海。

おほらかや、大<sup>おほ</sup>み言<sup>こと</sup>かのごと坐<sup>ま</sup>す、  
 八<sup>あめのした</sup>紘<sup>いへ</sup>げに宇<sup>いへ</sup>と、一つ宇<sup>いへ</sup>と。

祝ほぎまつれ、大やまと。すめらみくに皇國、  
仰いげいざ、けふこの日、大み軍。いくさ

聲はあがる、彌い榮やさか、

とどろきはいやあがる、彌い榮やさかとぞ。

## 紀元二千六百年頌

## 朗誦詩

盛りあがる盛りあがる國民の意志と感動とを以て、盛りあがる盛りあがる民族の血と肉とを以て、個の十の百の千の萬の億の底力を以て、今だ今だ今こそは祝はう。紀元二千六百年、ああ遂にこの日が來たのだ。

蕩々たる空、藹々たる土、洋々たる海。和風おのづからにして、麗光十方に布く。日の天にあるかくのごとく、民の仰いで霑ふかくのごとく、悠久二千六百年、祝典の今日が來たのだ。

ラヂオは傳へる式殿の森嚴を、目もあやなる幢幡、銀の銚射光の珠を。噺と鳴りわたる君が代の喇叭。金屏の前に立たします。

聖<sup>せい</sup>天子<sup>てんし</sup>、澄みに澄みとほる靈氣、聲ひとつせぬ五萬の呼吸、崇高<sup>すうかう</sup>なるこのひと時。靴音である。畏みに畏む總理大臣の靴音がする。奉る朗々たる壽詞<sup>じゆこと</sup>。湧きあがる湧きあがる。天皇陛下萬歳。

皇禮砲はとゞろきわたつた。帝都は彩光に輝き、港灣は滿艦飾した。宮をあげての簫篳<sup>せうひ</sup>策<sup>ちりき</sup>、浦安<sup>うらやす</sup>の舞<sup>まひ</sup>。國をあげての日章旗、神輿<sup>みこし</sup>、群衆。祝祭は氾濫し、ああ熱情は爆發した。轟けと、轟けとばかりに叫ぶ大日本帝國萬歳。

光あれ、輝きあれ、大日本。神國日本の姿はここにある。仰げよ萬世一系の皇統、巍々<sup>ぎぎ</sup>たる皇謨<sup>くわうぼ</sup>は無限に坐<sup>ま</sup>す。ああ、八紘<sup>かう</sup>一宇<sup>う</sup>、肇國<sup>てうこく</sup>の青雲<sup>せいうん</sup>は頭上にある。

かの正しきを養ひ、暉<sup>かが</sup>を重ね、慶<sup>めぐみ</sup>を積む。皇祖皇宗はこの徳に坐<sup>おは</sup>し、神ながら道に蒼古<sup>さうこ</sup>に、あやに畏き高千穂の聖火は今に燃え繼いで盡くるを知らぬ。(火だ、まさしく民族の祭典の火だ。)思へ、天業<sup>てんげふ</sup>恢<sup>くわい</sup>弘<sup>こう</sup>の黎明<sup>しのめ</sup>、鎮みに鎮む底つ岩根の上に宮柱<sup>みやばしら</sup>太し

き立てた檣原の高御座を、人皇第一代神倭磐余彦の天皇を、ああ、大和は國のまほろば、とりよろふ青垣、鷄は舞ひ、朗かにおほらかに草も木も言祝ぎ謳つた。

ああ、我が民族の清明心、正大、忠烈、武勇、風雅、廉潔の諸徳。精神は一貫する。傳統は山河と交響し、臣節は國土に根生ふ。大義の國日本、日本に光榮あれ。

展げ。世紀は轉換する。躍進更に躍進する。興隆日本の正しい相、この體制に信念あれ。

いにしへ、仇なすは討ちてしやみ、まつろはぬことむけ和した。砲煙のとどろき、爆彈の炸烈する、もとより聖業の完遂にある。大皇軍の征くところ必ず宣撫の恩澤がある。げにや隈なく御稜威は光被する。鵬翼萬里、北を被ひ、大陸を裏み、南へ更に南へ伸びる。曠古未曾有の東亞共榮圈、ああ、盟主日本。

盛りあがる盛りあがる國民の意志と感動とを以て、盛りあがる盛りあがる民族の血と肉とを以て、今だ今だ今こそは三唱しよう。聖壽の萬歳を、皇國の萬歳を。紀元二千六百年

の今日、祝典は氾濫する。熱鬧ねつたうは光と騰あがる。進め一億、とどろく皇禮砲せとの下より進め。大政翼贊の大行進を始め。行けよ皇國の盛せいだい大へ向つて、世界の新秩序へ向つて、人類の福祉ふくしに萬邦の融和に向つて。一齊にとどろかす登音あしおとを以て、個の十の百の千の萬の億の、靜かな底力を以て。



## 後記

## 新頌

『新頌』は紀元二千六百年記念として最近に刊行された。創作年月は『海豹と雲』以後、今日に及んでゐる。

詩風は『海豹と雲』の延長であり、概ね蒼古調である。私は曾てかう思惟した。

「古代の膽を捉へることは、あながち古語死語を漁ることではない。生々躍動した古代感情のリズムをこそ素手に捉へることである」と。

この所念よりして、この神ながらの道に立ち、かの蒼古に溯つて之を求めようとしたのである。而も現代の感覺を以て。

私はここに於て、これまでの全詩集を、この中の交聲曲詩篇「海道東征」に總括し、我が大成を所期した。この「海道東征」こそは、紀元二千六百年頌として日本文化中央聯盟の囑に應じて成した記念作であり、日本民族の物せる國民詩曲として、また信時潔氏の作

曲と相俟つて、革正の先聲を掲げたものと信じ得る。この交聲曲は東京音楽學校の演奏により五百人の合唱を以て公開せられ、ビクターに於てまた十二吋盤八枚にわたり吹き込まれた。さうして英獨の譯詩と共に、世界の樂匠たちにその寄するところになる祝典樂曲の返禮として海外へ贈られ、また放送せらるることになった。望外の幸である。因みにこの詩篇は神武天皇讚歌三部作の一つである。

「建速須佐之男命」の自由體長篇は、古事記を現代の感覺と角度とを以て新に解釋しようとした計畫の中の一試作であり、その一部である。私は同じくこの道を溯り、かの蒼雲を我が蒼雲と戴くであらう。

海豹と雲

初版

昭和四年八月

アルス版（絶版）

白秋全集第四卷

詩集Ⅳ

昭和六年一月

アルス版（絶版）

# 青空文庫情報

底本：「白秋詩歌集 第二卷」河出書房

1941（昭和16）年2月19日発行

※「後記」は「白秋詩歌集 第二卷」に対するものであるが「新頌」の見出しのつく部分のみを本文末に付記しました。

※「艫」と「臚」の混在は底本通りにしました。

入力：岡村和彦

校正：川山隆

2011年2月10日作成

2011年3月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 新頌

北原白秋

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>